



TITLE:

天文同好會觀測部月報

AUTHOR(S):

CITATION:

天文同好會觀測部月報. 天界 1931, 11(124): 389-394

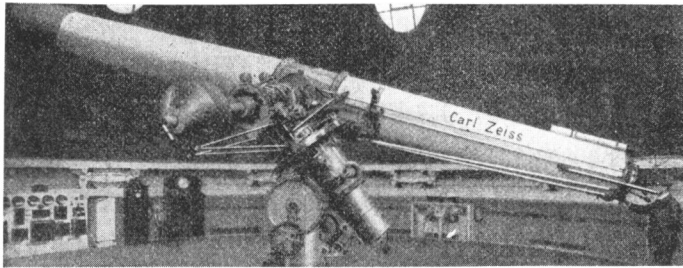
ISSUE DATE:

1931-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161692>

RIGHT:



天文同好會觀測部月報

流星課だより

小 横 孝 二 郎

いよいよ夏も盛りとなつた！ 流星のシーズンが来た！

本年度のペルセウス流星群は月の邪魔がないので全くうれしい。昨年度月明と悪天で失望した我々には今年のこの流星期が實に戀ひしかつた。流星觀測者ならずとも、未だ流星雨の美觀を味はれてゐない方々には来る8月12日、13日の夜半後を割いてほしい。そしてこの壯觀を味つていただきたい。眠いとか、蚊にくわれるとかの問題ぢやない。東に西に、南に北に飛びかふ流星は——まづ一時間平均50個は下るまい。或ひは100個以上も見られる方もあらう。兎も角も其の夜の流星觀望を希望して止まない。

× × × ×

古い様だが昨年11月以來の流星課の消息を一通り述べて見たい。第一に書かねばならぬのは觀測者の増加である。續々優秀な觀測家があらはれて來た。下保茂(札幌市) 廣瀬永治郎(岐阜縣) 麻生佐七郎(大阪市) 野村秋馬(和歌山縣)の諸君が新たに活躍さるゝこととなつた。微光流星のメンバーは別に變りはないが甚だ組織的、系統的に行はるゝ様になつた事の特記したい。此れ等の觀測者によつてなされた流星群の長期の追跡などはやがて重大な結論を導びき得るものと確信する。次に同時觀測が計畫的に行はれて來た事(特に中國四國班、北海道班等に)が喜ばしい事であらう。

觀測結果の方からしらべて見ると、11月の獅子座流星群では同月12日か

ら22日までの11日間に亘つて觀測された。奮闘されたのは原田、八幡、荒木、豊田、宮澤、齋藤の諸君であるが、本邦で行はれた同群の觀測では恐らく新レコードであらう。其の間觀測された流星數244個、中獅子座群に屬するものは108個である。出現の最も盛であつたのは18日の夜明前で一時間平均20個を數へてゐる。アメリカでは著しい流星雨が船溜中の觀測者に見られてゐる様である。いよいよ33年目の回歸も近づいた事だから今年の11月が大いに期待される。

次は12月の双子座流星群、これも獅子座群に劣らぬ良成績を収め得た。觀測者は山田、田中、八幡、宮澤、下保の諸君と私の6人である。10日から17日まで一日もかきさず継続的觀測が行はれたが、流星數總計321個中双子座群は180個に及んでゐる。極大日時は14.0日と推定された。

本年一月劈頭の四分儀群は月明の爲期待出来なかつたのであるが、私と長野縣の八幡君とは例年に劣らぬ出現を認めることが出来た。特に八幡君は4日拂曉3時間半の間に62個の同群に屬する流星を觀測された。

2月、3月は特記すべき流星群の出現はなかつた。しかし微光流星の長谷鹽見、窪田、能勢諸君の活動は目覺しいものである。

4月の琴座流星群は惡天候の爲概して不成績に終つた。下保、宮澤、齋藤、山田、廣瀬、能勢、窪田諸君の觀測より22日—23日に豊富な出現があつた事が察せられる。猶4月には例年の如く北冠座流星群が可成り多く觀測された事を附言して置く。

いよいよ Perseid の最盛期も近づいて來た。八月に入ると共に、流星の出現は夜毎に多くならう。やがて9日、10日にもなれば一時間の出現數は十數回に上るだらうし——12.13日の最盛期にはいとも華やかな流星雨を現出すること請合ひ！ 見落す勿れと叫び度い。

ひるがへつて流星課の現状は如何！ 新觀測者天野吉郎君(函館市)を得た外まづかはりはなし。此度は各地方班の活動狀況を述べることにせう。

A. 北海道班 齋藤、下保、天野の三氏がくつわを並べて奮闘されてゐる。現に五月中にも數回の同時觀測を決行された。未だ充分な成功は見られないが此後の成果は期して待つべきであらう。

B. 關東班 残念だが甚だ不振である。しかし前中國班の精鋭であつた長谷氏が微光流星で活躍されるし、古參豊田氏も力闘され様から悲觀するにも及ぶまい。

C. 中部班 八幡氏と新進の廣瀬氏の努力を挙げねばなるまい、一時極盛を保つた此班の現在は、觀測者減少のうらみがある。

D. 近畿班 花山天文臺の宮澤氏がいつも乍ら健闘をつゞけられてゐる。氏の一貫した繼續的の觀測は將來を充分期待し得やうと思ふ。近進の麻生氏は大阪の悪天と戦ひつゝ觀測されてゐる。微光流星の鹽見、能勢、窪田、村上の諸氏の奮闘振りは今更のぶるまでもなからう。

E. 中國四國班 荒木班長の下に統制ある觀測をつゞけてゐられる。長谷氏が去り、淺野氏が保養中ではあるが、小郡の山田氏はよく孤軍奮闘されてゐるのはうれしい。四國方面の觀測者が皆無となつたのは淋しい感がする。

F. 九州班 鎮西の雄田中氏(坂元氏と改姓さる)が數年來の努力を重ねてゐられる。しかし好敵手原田氏を失つた此の班はいささか淋しさを覺ゆるのは止むを得まい。後繼者の輩出を望んで止まない。

× × × ×

四月までの觀測略報は前號で述べたから、重ねて書くにも及ぶまい。五月上旬の水瓶群は豫期の如く全然駄目。其他には特別な流星群の出現は見られなかつた様である。

六月に入つて例のジヴスマン流星群。これは9日夜早くも鹽見氏によつて検出せられた。25分間の觀測より18個の流星を得たが、内4等級以上のもの四個を含んでゐる。輻射點の位置は $\alpha=234.5^\circ$ $\delta=+41.5^\circ$ これは昨年度の中村氏の觀測結果とよく符合してゐる。最盛期前後にも4等級以上の流星も數個づゝ見られてゐる様である。下保氏は8日夜165分間に20個の流星を觀測せられ、中9個(2個は疑はし)は $\alpha=260^\circ$ $\delta=+38^\circ$ の點を輻射點として放射してゐることを見出されたが、10日夜にはすでに此の流星群の出現は無かつた様子。恐らく突發的の流星群ではないかと思はれる。

最後に、三月より五月に至る三ヶ月間の觀測者及觀測回數を述べる。

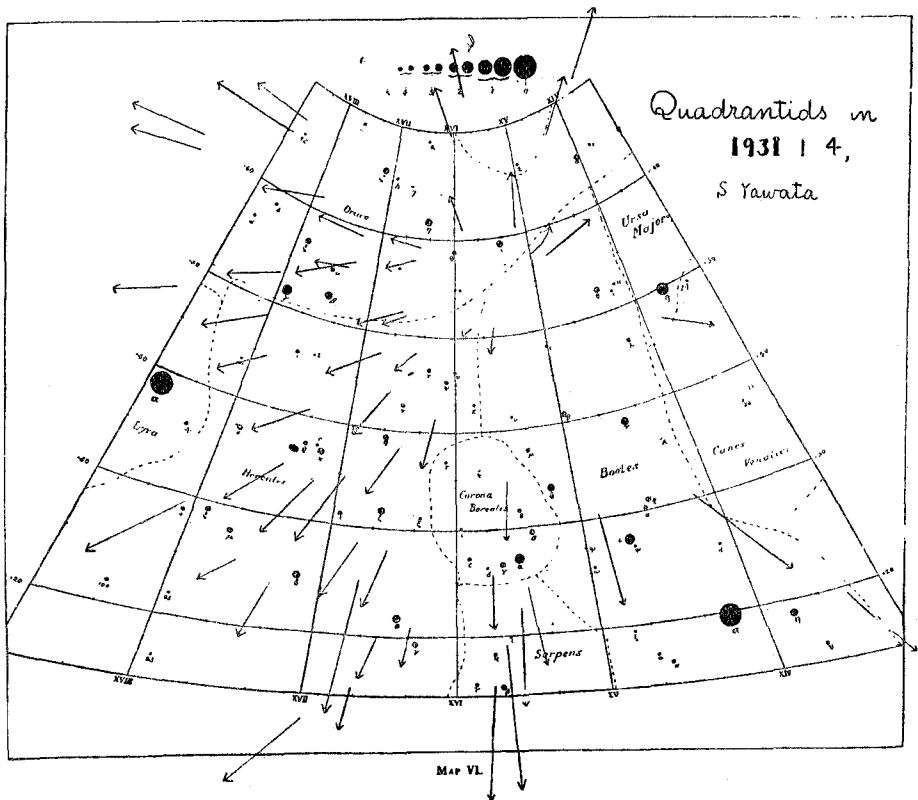
観 測 者	観 測 地	三月	四月	五月	計
廣瀬永治郎	岐 阜 縣 美 濃	5	4	1	10
宮 澤 堂	花 山 天 文 臺	4	3		7
小 槇 孝 二 郎	和歌山縣有田郡金屋	3		1	4
山 田 長	山 口 縣 小 郡	2	5	1	8
佐 藤 米 茂	島 根 縣 濱 田	1			1
齋 藤 平 八 郎	函 館 市	1	3	4	8
下 保 茂	札 幌 市	6	3	4	13
坂 元 鐵 馬	福 岡 市 外 箱 崎	3	3	17	23
八 幡 修 一	長野縣諏訪郡平野	3			3
荒 木 健 兒	倉 敷 天 文 臺	3	1		4
天 野 吉 郎	函 館 市		7	1	8
麻 生 佐 七 郎	大 阪 市		2		2
長 谷 秋 男	廣島市、東京市外中野	6		2	8
鹽 見 幸 三	京 都 府 福 知 山	1	3		4
窪 田 繁 夫	京 都 府 福 知 山	12	4		16
能 勢 繁 生	京 都 府 何 鹿 郡 中 筋	13	11		24
村 上 庫 二 郎	京 都 府 綾 部		3	1	4

黄 道 光 課 よ り

倉敷天文臺 荒 木 健 兒

1, 黄道光課長について 長い間御熱心につとめてゐられました稻葉課長が御研究の御都合で辭任され、後任として大分縣の龜井氏を推舉せられました。龜井氏は日本に於て最も多くの觀測をしてゐられる方でありまして、且昨年2月以來稻葉課長に代つて課の觀測記録を整理せられ、面白い研究發表もあり、名義こそありませんが、全く事實上の課長として働いて下さいましたので、私も最適任として心から御すすめ申し上げましたが斷然御引受けになりませず、却つて私を推されました。これには大いに困りましたが、間もなく山本先生から決定的に御下命あり、いづれ御都合もあらせられることと存じまして、やむなく當分の間柄にもない課長を御引受けせねばならぬことになりました。しかし、將來なるべく早い機會に最適任者を見出して御ゆづりしたいつもりでゐます。

2, 現在の觀測者 現在では熱心な觀測者が十數名もありまして誠ににぎ



やかであります。そして多くの有力な研究材料がどしどしつくれつつあり、日本の黄道光観測は全く世界的に有名になりました。

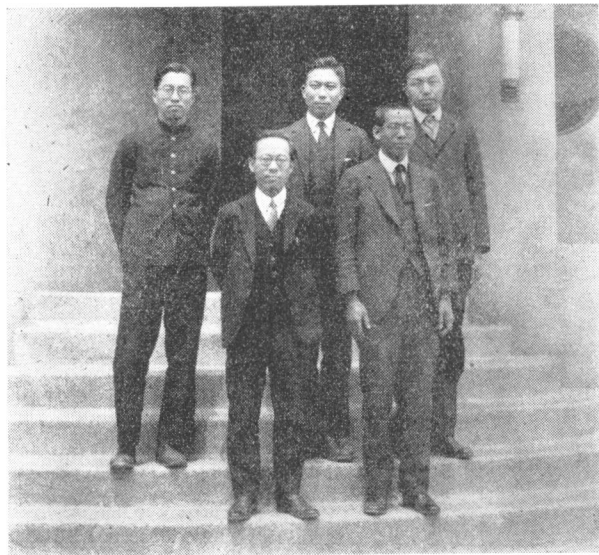
倉敷天文臺では観測はどうかと心配してゐましたが、不十分ながら出来るやうですから、これまで通り課の諸君と親しくして行けることを限りなく嬉しう存じます。

3. 私の希望 日本はもとより世界の天文學者にわらはれぬやう、最も正確に観測したいものです。

観測者の地理的分布は廣い方のぞましく、現在の札幌から大分までを何とかして擴張したいと思ひます。観測御希望の諸君は私まで御相談下さい。5月以後の西天の黄道光は次第に淡く観測もやや困難になりますが、こんな場合の記録も學的價值多く大切です。

4, 觀測の整理 これからは私がいたします。一ヶ月分づつまとめて御送り下さい。發表はブレテン及び天界によります。觀測用星圖及び觀測用紙はこれまで通り私から差上げます。(1931. III. 20)

黃道光課の幹部たち



小山氏 稻葉氏 中村氏
山本博士 荒木課長

(去4月10日・花山天文臺裏玄関にて)

編輯室より：——今日は土用の入りだと云ふのに、この涼しさはどうした事でせう。かう雨が續いては花山山でも、ルンペンの様に、毎晩空を眺めては皆んなが溜息をもらして居ます。こないだ近所に雷が落ちました。所在なきに、一體雷様は上から落ちるのか、下から落ちるのか考えて見ました。笑ちやいけない。知つてゐる方は手を舉げて御覽なさい。寺田博士も云つて居られる。昔の人は雷様は赤鬼、青鬼が太鼓を叩いて走り廻つて居るのだと考へて居たが、今の人はエレキのせいに歸して居る。一體エレキとデモレとどれ程違つて居るのです。

御聞きの方もあつたでせう。もう一月の餘になりすが、黃道課の稻葉理學士がラヂオで梅雨に就いて講演をなされた事がある。學士のお話によればもうとつくに。お天道様がカンカン照つてもいい筈です。かう話が違つては、學士に喰つかゝりなくなるぢやありませんか。